

学 位 論 文 要 旨

氏 名 辰野 浩美

題 目 児童期における正負感情の経験と感情表出性が心身の健康に及ぼす影響

近年、子どもの暴力やいじめ、犯罪などの問題行動が増加しており、その要因の一つとして、感情のコントロール、感情制御ができない「キレやすい」児童生徒の増加が挙げられている。また、これらの問題行動は小学校中学年ごろから漸増し、中学校になって急激に多発する傾向につながっている現状にあることが窺える。このため、小学校中・高学年において何らかの対策が必要であると考えられる。

これまで子どもの問題行動に対してとられてきた対策では、カウンセラーの配置などを通して継続的に治療的な介入を行ってきたが、子どもの問題行動が減少しているとは言い難い状況にある。また、仮に治療的介入が十分に行われているとしても、心身の病気や不応は年齢を重ねるにつれて問題が発現してくるため、治療的介入を行うだけでは効果的な介入ができていないとは言い難い。そのため、予防という観点に着目し、全ての人が高齢になる可能性があると考え、健康なうちにすべての人を対象に行われる一次予防の介入が必要であると考えられる。

子どもの健康・適応に影響を及ぼす心理・行動変数は多いが、近年感情の影響が注目されている。感情と健康・適応の関連について過去の知見を概観すると、感情表出性の程度と健康・適応との関連、正負感情経験と健康・適応の関連はそれぞれデータが蓄積されてきたが、感情表出性と正負感情経験の健康・適応への交互作用効果についての知見は少ない。さらに日本においては、子どもを対象にしたこのような研究はほとんど行われていないことが明らかになった。

そこで、本論文における一連の研究では、小学校中・高学年を対象にし、感情表出性と正負感情経験が健康・適応に及ぼす影響について、主効果および交互作用の効果について明らかにし、得られた基礎知見をもとに、健康・適応を増進する一次予防プログラムへの示唆を得ることを目的とした。

まず研究1・2において、感情表出性測定尺度の教師評定版を作成し、研究3・4では、感情表出性自己評定尺度を作成した。作成の結果、さらに精度を高める必要性はあるものの、いずれも信頼性と妥当性が示され、感情表出性の標準化された測定尺度が作成された。

次に研究5において、教師評定における感情表出性と正負感情経験が健康・適応に及ぼす影響を明らかにするために横断研究を行った。その結果、階層的重回帰分析において、感情表出性の主効果として、4・5年生における身体的反応、不機嫌・怒り感情、学校生活享受感情と

の有意な正の係数がみられた。また、感情表出性と負感情経験の有意な交互作用が、4年生の無気力において認められた。

さらに研究6において、自己評定における感情表出性と正負感情経験が健康・適応に及ぼす影響を明らかにするために横断研究を行った。その結果、感情表出性の主効果として、全体および6年生における不機嫌・怒り感情と無気力において有意な正の係数が見られた。また感情表出性と正感情経験の有意な交互作用が、全体の無気力ならびに女兒の学校生活享受感情において認められた。また感情表出性と負感情経験の有意な交互作用が、5年生の抑うつ・不安感情と全体の身体的反応において認められた。

研究5と研究6の結果の比較、つまり感情表出性の評定者の違いによる結果の比較を行うと、教師評定による評定の場合は4、5年生において有意な主効果が数多く認められ、自己評定の場合は6年生において有意な主効果が数多く認められていた。

最後に、研究7で感情表出性および正負感情経験と健康・適応の関連について予測的研究を行った。その結果、感情表出性は、教師評定、自己評定ともに、1～2か月を経たTime1からTime2への健康・適応変数の変化を予測できなかった。一方、教師評定において、感情表出性と正負感情経験の交互作用における結果として、Time1の感情表出性と正感情経験の有意な交互作用が4年生の抑うつ・不安感情において認められた。また、Time1の感情表出性と負感情経験の有意な交互作用が全体の身体的反応において認められ、さらには、Time1の正負感情経験の有意な交互作用が全体の身体的反応において認められた。

また自己評定では、感情表出性と正負感情経験の交互作用における結果として、Time1の感情表出性と正感情経験の有意な交互作用が、全体の抑うつ・不安感情、全体の不機嫌・怒り感情、5年生の無気力、全体の学校生活享受感情、男児の学校生活享受感情において認められた。さらにTime1の感情表出性と負感情経験の有意な交互作用が6年生の無気力と全体の身体的反応において認められた。加えて正感情経験と負感情経験の有意な交互作用が全体の無気力と女兒の無気力において認められた。

以上のような感情変数と健康・適応変数の関連から、感情表出のみを高めるとストレス反応を悪化させるが、負感情経験が高い場合には感情表出を高めることがストレス反応低減につながることで、負感情経験が高い場合には正感情経験を高めることが健康・適応を高めることで、正感情経験を高めることは健康・適応を高めるが、その際感情表出性を高めると健康・適応の低減につながることで示唆された。

最後に、本論文の最終章では、本研究の課題ならびに今後の予防教育への適用の可能性について考察された。まず感情表出性測定尺度の精度を高める必要性や予測的研究における手法の改善を検討していくことの必要性が考察された。そして今後の予防教育への適用の可能性として、学校で多くの子どもを対象におこなう一次予防教育プログラムを行なう際の感情表出性測定尺度の活用、評定者の異なる感情表出性尺度の活用による教師と子ども双方での結果の共有が指摘された。さらには、感情経験と感情表出性の交互作用の効果の存在が明らかになったことから、この交互作用の現象を考慮に入れ、従来の感情変数の操作を中心に展開される心身健康・適応への予防・介入の方法を再構築する必要性が示唆された。